性役割に対する価値観がスポーツ実施に及ぼす影響について
―既婚女性の性役割観とスポーツ実施状況に着目して―

佐藤　馨[1)]

The Effect of Gender Role Orientation on Sports Participation for Married Women

Kei SATO

Abstract

The purpose of this research is to clarify the effect of gender role orientation, sports participation and the barriers to a married woman's sports activity. The participants for analysis numbered 210. Gender role orientation is measured using Ito's (1978) MHF Scale. The individual's classification on the MHF Scale was provided "masculinity (M scale)," "femininity (F scale)", and "androgyny (H scale)". With this research, it was classified into the high frequency participation group, the low frequency participation group, and the non-participation group according to the frequency of sports.

As a result, the difference was not shown at the women's age, occupation and child's age in sports participation. Moreover, especially as for the distinction, gender role orientation was not seen with sports participation, either, but a gender role orientation was a sense of values equal, regardless of sports participation or non-sports participation. Regarding the time factor, there was a difference with work-time, housekeeping, and child-caring which is significant between the high frequency participation group, the low frequency participation group and the non-participation group. That is, it turns out that it has not been a problem at all in the high frequency participation group regarding time constraints. Regarding the prevention factor, it turns out that the women of the non-participation group resultingly give priority to family over oneself because of working, housekeeping, and child-caring. The women of the non-participation group have at least separated the gender role orientation and participation. As a result, although gender role does not influence consciousness, it has influenced participation. However, it is difficult to apply such a tendency to all women, because of the difference of women's positions and their varying perspectives on sports.

Key words：Married Women, Sports Participation, Gender Role, Orientation, MHF Scale

---

1）生涯スポーツ学科

Ⅰ．はじめに

余暇活動の場面で生じる障害や制約を性差によって検討した研究は，そのほとんどが女性の余暇活動が男性よりも不利益を被っていることを示唆してきた。例えば，余暇時間に着目した研究では，平日の余暇時間は性差が少ないものの，休日の余暇時間は男性と比較して女性は少ないことが分かっている（Shaw, 1985）。自尊心（self-esteem）と余暇活動を検討した研究では，女性は男性と比較して自尊心が低く，自尊心が低い者ほど余暇活動における制約が多いと指摘している（Raymore, Crawford and Godbey, 1994）。Jackson と Henderson（1995）は，女性は男性よりも余暇においてあらゆる面で制約があり，とりわけ「仲間の不足」，「家族の世話による多忙感」，「運動能力の欠如」，「情報の不足」，「移動手段の欠如」，「社会的状況が許さない」，「参加意欲の欠如」といった項目，すなわち人間関係による制約が大きく，また制約と家族との関係を検討した研究では，家族の存在が物理的な障害になるだけでなく精神的な障害になることが分かっている（Alterdott and Mccreedy, 1993）。JacsonとHenderson（1995）の研究でも「家族の世話に対する多忙感」，「社会的状況が許さない」といった項目は，女性の社会的立場に係る特有の阻害因子であると述べられている。こうした女性の余暇活動における制約は，比較的男女平等の環境が保障されると思われる学生の余暇活動にさえ存在し，女子は男子と比較して制約が多いことが明らかになっている（Wearing, 1992）。以上のことから，女性の余暇活動を考える上で，単に生物学的性差ではなく，社会的・文化的性差，いわゆるジェンダーの観点から検討する必要があると言える（Chambers, 1986）。

ジェンダーすなわち性役割と余暇活動との関連を検討した研究として，GentryとDoering（1978）が上げられる。彼らは，性役割を価値観の側面からアプローチし，それと余暇活動との関連を調べている。性役割に対する価値観については，「男性性（masculinity）」，「女性性（femininity）」，「両性具有性（androgyny）」，「未分化（undifferentiated）」の５つに分類し，高得点を示したカテゴリーを個々の価値観と位置づけている。ここで言う両性具有性（androgyny）とは，社会心理学の用語で，心理的に男性的特徴（masculinity）と女性的特徴（femini-nity）の両方を兼ね備えた価値観を持ち，多様な状況下において，男性的にも女性的にも臨機応変に行動できる価値観を持っている人を指している。結果として，両性具有性の価値観を志向する人は余暇活動に対する動機が強く，より多様な余暇活動を行なう傾向が見られた。こうした結果は，Hirschman（1984）の研究においても同様に見られ，さらにHenderson, StalnakerとGlenda（1988）の研究では，男性性の価値観を志向する女性と両性具有性の価値観を志向する女性は，余暇活動において障害が少なく，精神的に調整力が優れていることを明らかにした。以上の研究は，いずれも女性の持つ性役割に対する価値観の違いが余暇活動への接近を大きく左右していることを意味し，両性具有性の概念は女性の余暇研究に少なからず影響を与えていると言える（Henderson, Stalnaker and Glenda, 1988）。

ところで，両性具有性は社会心理学の領域において既に多くの研究がなされており，中でもBem（1974）は両性具有性の実証研究を行なった先駆者として挙げられる。Bemは「Bem Sex Role Inventory（BSRI）」と呼ばれる尺度を開発し，自らその尺度を用いて次の結果を導き出した。伝統的な性役割に対する価値観を強く持つ者は，内在化された性役割の基準に自己を適応させようとするため臨機応変に行動できないという結論である。現在でもBSRIは個人の性役割観を測定する有効な手段として様々な研究で用いられてい

る。

両性具有性の実証研究は日本でも行なわれており，伊藤（1978）のMHFスケールがそれにあたる。伊藤のMHFスケールは，BSRIを単に翻訳するだけでなく，両性具有性に値する測定尺度をHumanityと設定した点，さらに，この尺度によって個々の性役割観および社会的な性役割規範の測定を実施し，個人の価値観と社会における価値観との差を明らかにしている点が評価されている（伊藤, 1978，1983）。以上の理由から，本研究では性役割に対する価値観を測定する尺度として伊藤（1978）のMHFスケールを用いた。

本研究は，既婚女性の余暇活動の中でもスポーツに着目し，性役割に対する価値観の差がスポーツ実施状況の差にどのような影響を及ぼしているのか，スポーツ実施状況によってどのような障害があるのか検討することを目的とする。

なお本研究は，佐藤と守能が1998・1999年に口頭発表した内容に加筆，修正を加えたものである。また，本研究で用いるデータは平成９年に収集したものであるが，わが国において，これまで既婚女性のスポーツ実施を性役割に対する価値観から検討した研究はほとんど見られず，今後同様の研究を実施する際に比較可能な基礎資料になり得ると考え再分析を行なった。さらに再分析を行なうことにより，既婚女性のスポーツ活動に対して新たな知見を得ることを試みた。

Ⅱ．研究の方法

調査方法は，人口35万人の愛知県T市に在住する20歳以上の男女1,944名を選挙人名簿より無作為に抽出し，郵送法によって調査票の配布および回収を行なった。調査期間は平成９年11月11日（月）から同年12月６日（土）にわたって実施した。

本調査における回収率は34.8％（677部）であった。なお，回収した調査票677部のうち有効回答数は661部, そのうち男性が287名, 女性が374名であった。既婚者は全体の533名, 未婚者は128名であった。

本研究における分析対象は，スポーツ実施・非実施に関わらずスポーツに何らかの関心を示していることを前提とした上で，配偶者との関係からスポーツ実施環境や個人の性役割観を見るため既婚女性を対象とした。従って，分析対象数は，未婚者とスポーツに関心を示さない者を省いた210部である。

本研究では，伊藤（1978）のMHFスケールを用いて各個人の性役割観を測定する。スケールでは，男性に期待される特性を表す「Masculinity」をMスケール，男女に共通して期待される特性を表す「Humanity」をHスケール，女性に期待される特性を表わす「Femininity」をFスケールと分類し，①自分自身が持つ性役割観を測定する「個人的評価」，②社会一般で望まれている性役割観を測定する「社会的評価」，③異性に対する役割期待を測定する「異性への役割期待評価」，④同性に対する役割期待を測定する「同性への役割期待評価」の以上４つの側面から性役割に対する価値観を測定することができる。

本研究では，性役割に対する価値観とスポーツ実施との関係を明らかにすることから，個人的評価と異性への役割期待評価という２つの側面に着目して測定を行なった。回答方法はMHFの各スケールを表わす合計30個の形容詞から重要な順にすべて選択する強制選択法を用いている。各スケールにおける評価得点は，回答者に回答欄Ⅰ～Ⅴの順に６項目選択させた後，各回答欄に５点から１点までの点数を与え，Masculinity（以下，Mスケール），Humanity（以下，Hスケール），Femininity（以下，Fスケール）ごとの得点を計算する方法を用いた。

Ⅲ．結果および考察

本研究では，「週１回以上」と回答した者を「高頻度実施群」，「月１回以上」および「年数回」と回答した者を「低頻度実施群」，

表１　職業形態別にみたスポーツ実施頻度　　n（%）

職業形態	高頻度実施群 N=83	低頻度実施群 N=57	非実施群 N=70	
フルタイム	29（42.0）	19（27.5）	21（30.5）	69（100.0）
専業主婦	29（42.0）	13（18.9）	27（39.1）	69（100.0）
パートタイム	25（34.8）	25（34.8）	22（31.4）	72（100.0）

χ^2=4.955　d.f.=4　n.s.

表２　実施頻度群別にみた本人の年齢および末子の年齢

実施頻度群	N	本人の年齢 Mean（SD）	末子の年齢 Mean（SD）
高頻度実施群	83	46.94（ 9.47）	15.88（8.79）
低頻度実施群	57	41.93（10.76）	12.52（9.20）
非実施群	70	45.57（11.23）	15.20（11.6）
F値		3.95*	1.62

注）末子の年齢は、子どもを持たない者を除いて算出　＊:p<.05

「していない」と回答した者を「非実施群」とグルーピングした。なお，非実施群については，将来的にスポーツ実施を希望する者を分析対象とした。本研究における実施頻度の分類は，総理府の「体力・スポーツに関する世論調査」に基づいて，週1回以上の運動を基準にし，週一回以上の運動を高頻度実施，それ以下を低頻度実施としている。

１．実施頻度群別にみた基本的属性

高頻度実施群，低頻度実施群，非実施群，各群の属性を職業形態，本人の年齢，末子の年齢によって比較した（表１，２）。表１は，職業形態を「フルタイム」，「パートタイム」，「専業主婦」の３つに分類し，各群との差を見たものである。職業形態によってスポーツ実施および非実施に顕著な差は見られなかった。女性の余暇活動と職業の関係についてレビューした研究によると，女性が何らかの職業に就くことは，余暇時間における物理的な制約は増すものの，経済的自立，社会との接触，家庭からの自立が促され，結果的に余暇活動を促進することが分かっている（Kay, 1996）。しかしながら，本研究の結果において有職者とそうでない者とでスポーツ実施に違いは認められず，何らかの職業に就くことがスポーツ実施を誘発するという結果には至らなかった。

既婚女性のライフステージを考えた場合，末子の年齢と本人の年齢について検討することは必要である。というのは，Deem（1982）の研究において，既に既婚女性の余暇活動を制約する一つの要因として「16歳以下の子どもの存在」が指摘されていたからである。そこで，実施頻度群別に本人の年齢と末子の年齢を表２に示した。末子の年齢を実施頻度群別に見たところ，高頻度実施群の15.8歳が最も高く，次に非実施群の15.2歳，最後に低頻度実施群の12.5歳という結果が得られた。また３群間の差の検定を行った結果，有意な差は見られなかった。これは子育て期にある子どもの存在がスポーツ実施の有無に影響していないためと考えられる。さらに，既婚女性本人の年齢について見ると，３グループ中平均年齢が最も高かったのが高頻度実施群の46.9歳，次いで非実施群の45.5歳，低頻度実施群の41.9歳という結果が得られた。この年齢については群間に有意な差が見られたが，その差は高頻度実施群と低頻度実施群の２群間に見られたものである。従って，本人の年

表３　実施頻度群別による自己の性に対する性役割観評価

尺度	実施頻度群	N	Mean	SD	F値
Masculinity	高頻度実施群	83	30.35	5.46	
	低頻度実施群	57	30.20	4.93	0.203
	非実施群	70	29.84	4.53	
Humanity	高頻度実施群	83	38.88	3.87	
	低頻度実施群	57	39.38	2.62	0.654
	非実施群	70	38.69	3.35	
Femininity	高頻度実施群	83	20.75	4.61	
	低頻度実施群	57	20.40	4.74	0.851
	非実施群	70	21.46	4.62	

n.s.

表４　男女別にみた自己の性に対する性役割評価

尺度	性別	N	Mean	SD	t値
Masculinity	男性	192	32.42	8.08	4.054***
	女性	210	29.42	6.74	
Humanity	男性	192	35.72	8.23	3.074**
	女性	210	38.04	6.83	
Femininity	男性	192	18.09	5.19	4.258***
	女性	210	21.07	5.58	

**p<.01　***p<.001

齢がスポーツ実施および非実施に直接影響していないことが分かった。

以上，高頻度実施群，低頻度実施群，非実施群の属性を明らかにするため，職業形態，年齢，末子の年齢から分析を行なったが，そのいずれにおいてもスポーツ実施群と非実施群を大きく隔てる要因とはならないことが分かった。

２．実施頻度群別による自己の性に対する性役割観

性役割に対する価値観がスポーツ実施にどのように影響するのか検討するため，スポーツ実施頻度の違いによって女性自身の性役割に対する価値観，つまり「男は仕事，女は家庭」に代表される性役割観に差異があるか検討するため，本研究ではMHFスケールによる測定を行なった。測定後スケールごとに高頻度実施群，低頻度実施群，非実施群の平均得点と検定結果を示した（表３）。高頻度実施群，低頻度実施群，非実施群，これら３グループと自己の性に対する役割観との関係について見ると，Mスケール，Hスケール，Fスケールの各尺度で有為な差は見られなかった。結果として，既婚女性全体に支持された価値観は，男女に共通して期待される特性を示すHスケール，次いで男性に期待される特性を示すMスケール，最後に女性に期待される特性を示すFスケールという順序で評価された。このことは，スポーツ実施，非実施の違いによって女性が自分の性に対して抱いている価値観に差が認められないことを意味すると同時に，女性全体としての性役割に対する価値観が，伝統的な役割を受容するのではなく，性別に関係なく人として期待される役割を受容しているということも示唆している。すなわち，旧来の性役割に対して女性はある程度否定的な姿勢を示していると考えられる。

表４は男女別にそれぞれ自己の性に対する性役割評価を示した。というのは，本研究が既婚女性を対象としていることを考慮し，そ

の対極に位置する既婚男性との比較が必要と考えたからである。結果としてMスケール，Hスケール，Fスケールいずれの項目も男女間で有為な差が認められた。また，全体として男女ともに人として期待される特性を示すHスケールを最も高く評価し，逆に女性に望ましいとされる特性を示すFスケールを低く評価する傾向が見られた。

女性の場合，Hスケール程ではないがMスケールを高く評価していることから，自分の性に期待される役割を示すFスケールを否定的に受け止めている傾向が見られた。一方男性の場合，女性同様Hスケールを最も高く評価しているものの，女性のように自分の性に期待される役割を低く評価することはなく，むしろHスケールと同程度の評価をMスケールに下していることが分かった。男女とも女性役割を低く位置づけているということは，換言すれば，社会全体として女性役割に対する価値を低く置いてということを意味している。以上の結果は，伊藤（1978）の研究とほぼ一致し，こうした男女の価値観の差を伊藤（1978）は次のように考察している。男性は男性役割を積極的に受容しているのに対し，女性は女性役割を否定的に受容し，その代替として両性具有性を示すHスケールを受容しているのである。

これは，女性が望む役割と社会が女性に望む役割との間にギャップが存在することを示していると解釈できる。

３．実施頻度群別にみたスケール項目の評価内容

伊藤（1978，1981，1983，1998）は，個々の性役割観を測定する個人的評価や社会的に求められる性役割観を測定する社会的評価において，全般にFスケール項目よりMスケール項目に高い価値が付与されてることを示唆した。すなわち，社会全体として男性役割を重視する一方で，女性役割を軽視する傾向が見られることを指摘した訳であるが，この結果はあくまでもMスケールおよびFスケールの項目に対する評定値の合計から判断されるため，単にスケールの比率が算出されているに過ぎない。そうしたスケールによる性役割評価の問題点を飯野（1984）は次のように指摘している。スケール評価は，算出された得点から評価内容を把握することが困難であるため，一般的な傾向だけに限らず詳細な評価内容の分析が必要であると述べている。この指摘を踏まえ本研究では，女性全体としてHスケールを重視する傾向が見られたが，そのスケールの評価内容がすべて等質であるのか，表３および表４から判断することは困難と言える。そこで，MHFスケールを表わす30個の形容詞について単語ごとに総合得点を計算し，平均値と検定結果を示したものが表５である。分析の結果，Mスケールの項目「冒険心に富んだ」において有意傾向が，Hスケールの項目「忍耐強い」，Fスケールの項目「言葉づかいの丁寧な」において有意な差が見られた。それぞれの項目について見ると，Mスケール項目の「冒険心に富んだ」については，高頻度実施群が高い得点を示し，Fスケール項目の「言葉づかいの丁寧な」については，非実施群が高い得点を示した。さらに，Hスケール項目の「忍耐強い」については，低頻度実施群が高得点を示している。こうした傾向の違いを単純に考察することはできないが，少なくとも高頻度でスポーツを実施している女性は，Mスケール項目の「冒険心に富んだ」を高く評価していることから推測すると，好奇心旺盛でしかも非常に積極的な志向の持ち主であると言えるのではないだろうか。

４．実施頻度群別および性別による阻害要因

既婚女性におけるスポーツ実施の促進を考えるならば，具体的に障害となる要因を明らかにすることが必要と思われる。そこで阻害要因として20項目を質問紙に列挙し，回答者にスポーツを実施するあるいは実施しようと

表５　MHFスケール構成項目の実施頻度群比較

項目	高頻度実施群（N＝83） Mean	SD	低頻度実施群（N＝57） Mean	SD	非実施群（N＝70） Mean	SD	F値
Mスケール							
冒険心に富んだ	2.79	1.22	2.54	1.08	2.32	1.24	2.97 †
たくましい	2.60	1.22	2.52	1.23	2.54	1.24	0.08
大胆な	1.94	1.06	1.74	0.87	1.64	0.84	2.00
指導力のある	2.46	1.27	2.46	1.06	2.65	0.98	0.65
信念をもった	3.78	1.09	4.00	0.97	3.70	0.99	1.39
頼りがいのある	2.85	0.97	2.81	0.99	2.87	1.07	0.05
行動力のある	3.76	0.99	3.61	1.11	3.72	1.08	0.32
自己主張のできる	3.07	1.22	3.31	1.26	3.35	1.08	1.20
意志の強い	3.51	1.22	3.54	1.21	3.46	1.21	0.06
決断力がある	3.59	1.04	3.67	1.20	3.61	1.06	0.09
Hスケール							
忍耐強い	3.40	1.29	3.96	0.89	3.35	1.33	4.70 **
心の広い	4.24	0.94	4.43	0.79	4.14	0.94	1.48
頭のよい	2.85	1.19	3.07	1.27	3.12	1.33	0.94
明るい	4.54	0.74	4.28	1.02	4.55	0.87	1.89
暖かい	3.63	1.15	3.72	1.09	3.65	1.29	0.10
誠実な	4.15	1.24	4.17	1.08	4.12	1.08	0.03
健康な	4.72	0.65	4.52	0.82	4.67	0.82	1.18
率直な	3.15	1.18	2.93	1.18	3.12	1.31	0.58
自分の生き方のある	4.15	1.04	4.26	1.01	4.04	1.04	0.66
視野の広い	4.10	0.94	4.06	0.96	3.99	1.05	0.25
Fスケール							
かわいい	2.27	1.07	2.26	1.23	2.19	1.19	0.10
優雅な	2.16	1.31	1.85	0.90	2.22	1.16	1.68
色気のある	1.44	0.83	1.31	0.64	1.46	0.98	0.53
献身的な	2.33	1.21	2.48	1.13	2.54	1.12	0.65
あいきょうのある	2.52	1.16	2.56	1.14	2.72	1.20	0.60
言葉遣いの丁寧な	2.21	0.95	2.41	1.17	2.68	1.08	3.77 *
繊細な	1.96	0.87	2.04	1.08	2.06	1.08	0.19
従順な	1.73	0.97	1.81	1.08	1.77	1.07	0.11
静かな	1.67	0.83	1.57	0.88	1.70	0.94	0.31
おしゃれな	2.43	1.52	2.11	1.19	2.07	1.30	1.51

**p<.01　*p<.05　† p<.10

する際に障害となる項目についてそれぞれ「あてはまる」,「どちらかといえばあてはまる」,「どちらかといえばあてはまらない」,「あてはまらない」の４段階で評価する手法を用いた。分析は全体の傾向を把握するというために各項目の評価を得点化し，一元配置の分散分析を行なった（表６）。また，この20項目を順に「時間的要因」,「社会的要因」,「消極的態度要因」,「条件的要因」そして「技術的・体力的要因」の５要因に分類し，女性のスポーツ実施頻度群別による比較を行なった。

実施頻度群別に見ると５要因のいずれにも差が見られた。時間的要因については，仕事,

表６　実施頻度群別にみたスポーツ実施を阻害する要因

	項目	実施頻度別 高頻度実施群（N＝83） Mean	SD	低頻度実施群（N＝57） Mean	SD	非実施群（N＝70） Mean	SD	F値
時間的要因	仕事が忙しくて時間がない	2.94	1.00	2.54	1.14	2.43	1.15	4.63*
	家事が忙しくて時間がない	3.06	0.83	2.47	1.09	2.63	0.95	7.47***
	育児が忙しくて時間がない	3.49	0.83	2.89	1.19	3.04	1.25	6.02**
	社会教育活動や地域活動が忙しくて時間がない	3.67	0.68	3.51	0.78	3.69	0.63	1.27
社会的要因	配偶者に気兼ねする	3.11	1.06	3.39	0.84	3.23	1.01	1.34
	親に気兼ねする	3.54	0.94	3.47	0.95	3.36	1.12	0.65
	子どものことが気になる	3.24	0.93	3.00	1.14	2.99	1.16	1.36
	家族の都合によりスケジュールが思うように組めない	2.86	1.15	2.72	1.22	2.13	1.14	1.19***
	世間の目が気になる	3.65	0.63	3.81	0.48	3.67	0.70	3.93
消極的態度要因	スポーツ・運動以外の活動に興味を持っている	2.22	1.19	2.30	1.12	2.54	1.19	1.54
	スポーツ・運動に興味が持てない	3.75	0.58	3.72	0.62	3.47	0.38	3.93*
	スポーツ・運動が嫌いである	3.57	0.72	3.47	0.95	3.37	0.82	1.07
条件的要因	費用がかかる	3.04	0.92	2.95	1.04	2.70	1.11	2.14
	一緒にする仲間がいない	3.01	1.07	3.09	1.02	2.20	1.11	14.58***
	指導者がいない	3.20	0.97	3.21	0.98	2.39	1.18	14.06***
	近くに適当な施設がない	3.14	1.02	3.05	1.04	2.91	1.09	0.84
	スポーツ・運動に関する情報が不足している	3.06	0.95	2.95	1.11	2.44	1.10	7.15***
技術的・体力的要因	からだが弱い	3.69	0.73	3.35	0.99	3.37	0.90	3.53*
	体力がない	3.14	1.03	2.91	1.15	2.74	1.10	2.64
	スポーツ・運動するのが下手である	2.77	1.05	2.84	1.01	2.34	1.20	4.14*

***p<.001　**p<.01　*p<.05

家事，育児による時間的障害は，高頻度実施群と低頻度実施群および非実施群との間で有意な差が見られた。すなわち，時間的な障害については，高頻度実施群では全く問題になっていないことが分かる。単純に解釈すれば，今現在スポーツを実施しているのだから時間があって然りと考えるのが自然であろう。しかしながら，非実施群，低頻度実施群に属する女性は，なぜ時間がないのであろうか。例えば，育児に関して言えば，先に示したスポーツ実施と末子との関係を検討した結果を見ても，乳幼児期にある子どもの存在は問題にならなかった。また，家事に関しても同様で，職業形態との関連を検討しても特に差が見られなかったため，仕事と家庭の両立による物理的な時間の制約があるようには見受けられないのである。このことは，社会的要因の構成項目である家族の都合により思うようにスケジュールが組めないを考察することにより，いくらか解釈可能になると思われる。家族の都合を優先するのは非実施群に見られる特徴であるが，彼らが日常生活において家族を主体として捉えている限り，自己の主体性が問われるスポーツ活動は極めて困難であることが窺える。さらに非実施群に関しては，仲間不足，指導者不足，情報不足といった条件的要因に有意差が見られるが，スポーツをするという行為を現実的に捉えようとするこ

とによってこれらの問題はある程度解消できると思われる。というのは，仲間や技術を必要としないスポーツあるいは運動は多種多様にあり，高度情報化社会と言われる現代社会においては情報を手に入れることはそれほど難しいことではないからである。上述の結果を考慮するならば，スポーツをする，しないを大きく隔てているのは，女性自身がスポーツをどこまで重視しているかという問題が重要になるのではないだろうか。

Ⅳ．まとめ

職業形態，末子の年齢，本人の年齢によってスポーツ実施あるいは非実施によって大差は見られなかった。つまり本研究の結果は，実施頻度群の属性に大きな差がなかったと言える。また，自己の性に対する役割観についても実施頻度群別によって特に違いは見られなかったことから，性役割観についてもほぼ等しい価値観であると判断され，結果的に先行研究を支持するものではなかった。具体的に示すと，全体として女性は自分の性に期待される特性を表わすFスケールを低く評価し，男女に共通して期待される特性を表わすHスケールを高く評価する傾向が見られた。一方男性は，Hスケールを高く評価すると同時に男性に期待される特性を表わすMスケールも高く評価する傾向があった。すなわち，男性は性役割に囚われない価値観を評価しながら旧態依然の性役割観を払拭できないでいると言えよう。こうした男女の価値観の差は，本研究の対象者が既婚者であることを考慮すると，夫婦相互で何らかの影響を及ぼすことは避けられず，結果的に女性のスポーツ実施に制約を与えているように思われる。

女性のスポーツ実施を阻害する要因に関しては，仕事，家事，育児による時間不足や自分よりも家族を優先させることで生じる障害の程度がスポーツ実施あるいは非実施によって異なっていた。少なくとも，非実施群の女性については，実際の行動と性役割に対する自身の価値観には乖離が生じているように見受けられる。こうした現象は，飯野（1984）の指摘によってある程度理解可能となるであろう。女性にとって社会的に期待される性役割観と個々の性役割観に差異が生じる場合，社会的性役割観を優先すれば社会生活に支障は来たさない，一方，個人の性役割観を優先すれば社会的にその行動は逸脱したものと解釈され，女性自身の意識と行動に軋轢が生じるというものである。

最後に，女性のスポーツ実施と性役割を検討する際に忘れてならないことは，以上のような結果をどのように理解するかという問題である。本研究の結果からすれば，全体的に女性の価値観は旧態依然の価値観から離脱しているように思われる。しかしながら，スポーツにおける障害を検討した場合，女性の家庭に関連した障害の多さは依然として変わらないままである。すなわち，意識レベルでは伝統的な性役割を否定しながら，行動レベルではそれが未だ影響しているように見えるのである。ただし，そうした傾向をすべての女性に当てはめることは短絡的な結論を導くと考える。つまり，女性であっても置かれた立場や状況は個々で異なり，またスポーツ実施に対する意識も個々で差があるのは当然考慮されることであり，既婚女性すべてが女性役割による制約を受け，さらにそれによってスポーツ実施が阻害されていると結論づけるのは早計ではないだろうか。今後，そうした点を明らかにする手立てとして，個々の性役割に対する価値観と併せてその人がスポーツをどの程度重視しているのかを明らかにした上で，改めてスポーツ実施における阻害要因を検討する必要があると考える。

付　記

本論文は，1998年，1999年の日本体育学会において発表した内容に加筆，修正したものである。

謝　辞

調査実施に際して快く協力してくださった愛知県豊橋市スポーツ課　小野田益己氏をはじめとする職員の方々，および調査に協力してくださった方々に厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

Altergott, Karen. & Mccreedy, Cornell Christine（1993）Gender and family status across the life course: Constraints on five types of leisure. Society and Leisure 16, 151-180.

東清和・鈴木淳子（1991）性役割態度の展望. 心理学研究　62, 270-276.

Bem, L Sandra（1974）The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical psychology 42, 155-162.

Chambers, A Deborah（1986）The constrains of work and domestic schedules on women ṡ leisure. Leisure Studies 5, 309-325.

Deem, Rosemary（1982）Women, leisure and inequality. Leisure Studies 1, 29-46.

遠藤久美・橋本宰（1998）性役割同一性が青年の自己実現に及ぼす影響について．教育心理学研究　46, 86-94.

Gentry, W James & Doering, Mildred（1979）Sex role orientation and leisure. Journal of leisure research 11, 102-111.

Henderson, A Karla. Stalnaker, Deborah. & Glenda, Taylor（1988）The relationship between barriers to recreation and gender-role personality traits for women. Journal of Leisure Research 20, 69-80.

樋口康彦（1997）性役割認知と達成動機の関係についての考察―大学生男女を対象にして―. 青年心理学研究　9, 19-30.

Hirschman, C Elizabeth（1984）Leisure motives and sex roles. Journal of Leisure Research 16, 209-223.

堀田美保（1998）性役割分担に関する社会における一般的意見の分布―大学生による推定―. 教育心理学研究　46, 221-228.

飯野晴美（1984）「性役割」という概念の多面性について．心理学評論　27, 158-171.

伊藤裕子（1978）性役割の評価に関する研究．教育心理学研究　26, 1-11.

伊藤裕子（1981）女子青年の性役割意識の構造．教育心理学研究　29, 84-87.

伊藤裕子（1998）高校生のジェンダーをめぐる意識．教育心理学研究　46, 247-254.

伊藤裕子・秋津慶子（1983）青年期における性役割観および性役割期待の認知．教育心理学研究　31, 146-152.

Jackson, L Edger & Henderson, A Karla（1995）Gender-based analysis of leisure constraints. Leisure sciences 17, 31-51.

鎌田とし子・矢澤澄子・木本喜美子（1999）『講座社会学14 ジェンダー：１総論 ジェンダー研究の現段階』．東京大学出版会．1-29.

賀谷恵美子（1981）『女性社会学をめざして：Ⅱ-2　性役割の社会化』．女性社会学研究会．113-154.

三井宏隆（1989）心理学的両性具有とは何か―Bem, S.L.の考え方とアプローチを中心にして―．実験社会心理学研究　28, 163-169.

Raymore, A Leslie. Crawford, W Duane. & Godbey, C Geoffrey（1994）Self-esteem, gender and socioeconomic status: Their relation to perceptions of constraint on leisure among adolesce-nts. Journal of Leisure Research 26, 99-118.

佐藤馨・守能信次（1998）女性の役割受容とスポーツ実施に関する研究―自己の役割受容とスポーツ環境に着目して―．日本体育学会第49回大会号．p.196

佐藤馨・守能信次（1999）男女の性役割観とスポーツ実施に関する研究―自己の性および異性に対する性役割観とスポーツ実施環境に着目して―．日本体育学会第50回大会号．p.293

佐藤馨・守能信次（2001）性別からみたスポーツ実施と自己の価値観に関する研究．日本体育学会第52回大会号．p.212

Shaw, M Susan（1985）Gender and leisure：Inequality in the distribution of leisure time. Journal of Leisure Research 17, 266-282.

鈴木淳子（1994）脱男性役割態度スケール（SARLM）の作成. 心理学研究　64, 451-459.

鈴木淳子（1994）平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成．心理学研究　65, 31-41.

Tess, Kay（1996）Women's work and women's worth：The leisure implications of women's changing employment patterns 15, 49-64.

Wearing, Betsy.（1992）Leisure and women's identity in late adolescence：Constraints and opportunities. Society and Leisure 15, 323-343